

Vol.29 2020年 9月 発行

NPO 法人 CAP 広島だより

発行：特定非営利活動法人CAP広島 〒738-0011 廿日市市駅前 1-3号

TEL・FAX 0829-20-5114

e-mail cap-hiroshima@viola.ocn.ne.jp

HP <https://caphiroshima.org>





理事長退任によせて～25年をふりかえる

下西 さや子

振り返れば CAP を始めて 25 年。当時幼児だった娘が一児の親になるほどの年月が経ったことに、いまさらながら自分でも驚いています。CAP から折々にヒントを得、また、CAP を通しての出会いから多くのことを学んだ歳月でした。

講演やおとなワークが主だった私は、被虐待経験のある人、子育てへの不安を抱いている人、夫や息子からの暴力に悩んでいる人から、主催者や新聞社を通して個人的にご連絡を頂くことが、まだ支援体制の乏しかった 2000 年前後には特によくありました。そのなかから今も心に残っている出会いの一端を共有させていただくことにします。

(プライバシーへの配慮から、本人の特定につながる情報を少し加工していることと、紙幅の都合から概要のみになることをお許しください)

この出会いの発端は、小学校での子どもワークでした。ワークを受けた 4 年生の A さんが「両親からテストの点が悪いと夕食抜きとか、たくさんの決まり事があり、それを少しでも破ると叩く殴るなどの体罰を受けている」とトークタイムでメンバーに訴えたのです。

メンバーは話を聴いた後で、担任の先生にも話すことを勧め、A さんに付き添いました。先生はプログラムのなかの台詞にあるように「よく話してくれたね」と丁寧に話を聴いてくださったようです。

たまたま、この先生と知り合いだったこともあり、その日の夜、電話をもらいました。先生の話では、A さんの訴えを、地元でよく知られた教育者である父親と教育熱心な母親とを思い浮かべ、信じられない気持ちで聞いたこと。そして放課後に A さんのお母さんから連絡があり、「娘から、ワークを受けて興奮し、先生に作り話をしてしまったと打ち明けられた。心配かけて申し訳ない」という話を聞いて、A さんがなぜそんなことを話したのか釈然とし

ない思いはありつつも、ほっとしたところがある、と言われました。

私は、CAPのワークの後、子どもがトークタイムでありもしない話をしたという例は一度も聞いたことがない。子どもが担任に家庭での暴力について話すのはとても勇気がいることなので、Aさんの話したことを信じてほしいと伝えました。

また、Aさんのお母さんが私の連絡先を尋ねられたので伝えていいかと聞かれ、了承しました。



それから2~3日経って、おかあさんから私に電話がありました。混乱しておられる様子が電話口から伝わってきました。「娘の話したことは事実である。夫から体罰を受けないように、厳しくしつけているつもりだったが、娘が抵抗するようになって、自分も手をあげるようになってしまった。今回のことで娘の気持ちがよくわかったので、今後娘が安心できるような家庭にしていきたい」というお話でした。

おかあさんが事実を認めてくれたことにまずはホッとしていると、「実は夫から暴力を受けている」ことを涙ながらに打ち明けてくださいました。子ども家庭センターに相談に行くこと、担任の先生に事実を話すことを強く勧めましたが、「この度のことが世間に知られると大変なことになるので、学校にも秘密にしてほしい」と強く言われました。しかし、このまま担任に事実を話さないでAさんが追い詰められてしまうので、「体罰があったことは事実だ」ということだけでも伝えてほしいとお願いしたところ、最終的には了承してくださいました。

その後、Aさんとおかあさんの心身の安全確保をどうしていけばいいか、名前などは伏せたまま婦人相談所の相談員と話し合いながら、おかあさんと連絡をとりあいました。

それから2年半の間、色んなことがありましたが、離婚が成立しました。久しぶりに会った時のおかあさんは、初めて電話をもらったときとは別人のように、生き生きと仕事をする

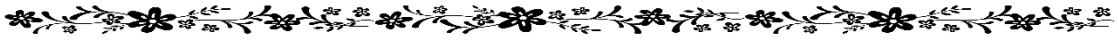


女性に変わられていました。（これが本来の姿なのでしょう）

うまくいった例ばかりではありません。DV夫から逃げることができたと思っていたら、連れて逃げた男の子から暴力を振るわれるようになったという話は珍しいことではありません。配偶者暴力相談支援センターはもちろん、児童相談所、子どもの通学先のスクールカウンセラー、警察の生活安全課など、あちこちに相談しましたが、18歳未満の子どもからの暴力に対応してくれるところはありませんでした。（現在もです）

親から虐待を受けて育ち、子育てに不安を抱えているおかあさんたちとの出会いもありました。同じような悩みを持った当事者の会を作り、月2回の語り合いを託児付きで行うことができたのは、公民館のバックアップがあったからでした。会を続けるうちに、皆さんの顔が輝いてきたことが強く印象に残っています。この当事者の会の一員だったBさんは、その後、保健師の資格を取得して、虐待のリスクの高い親のケアをしておられます。

こうした出会いは、いずれも何らかの形でCAPと接点のある方々でした。CAPは、暴力にあっている人の人生を変えるほどの力を持っています。その活動の一端を担うことができたことを改めて幸せに思います。そして、今も誇りに思っています。



「今」「ここ」とはちがう「世界」があることの大切さ

理事 横藤田 誠（広島大学大学院教授）



私は以前、CAP 広島の理事を務めさせていただいたことがあります。5、6年前かなと思っていたら、もっと前だったようです。この度縁あって、再びCAP活動に関わる機会を与えられました。

私は憲法を専攻し、障害者など「不利な立場の人々」に関する人権の問題を主な研究対象としていますが、子どもについての専門的な研究をあまりしていません。でも、CAPの皆さんが気持ちを寄せる子どもたちの心情は、ほんの少しだけわかるような気がします。

私は、生後7か月でポリオに罹患し、それ以来両足と右手に障害をもって生きてきました。今なら違う道もあったでしょうが、当時の障害児はほとんど自動的に施設に入れられました。私の場合、5歳から福山の実家を離れ、当時広島市内にあった（小学校3年の夏休み、西条に移った）肢体不自由児施設で生活するようになりました。そこには、友情、信頼、助け合い、いじめ、派閥、親分子分、差別、排除等々、世の中にあるものはたいていありました。決して天国ではありませんでしたが、今もつながる生涯の友を得た貴重な場でもありました。

施設の子たちは、健常者のことを「普通の人」、外の学校を「普通の学校」と呼んでいました。周囲が皆障害児という私たちの生活がどう考えても「普通」とは思えなかったからです。私たちがここにいるのは、障害のあるため仕方ないことで、外には「普通の社会」があるということを、私たちは知っていました。施設の皆ではなかったかもしれませんが、少なくとも私は、「普通の社会」に劣等感を抱いていました。

そんな私が高校は普通の学校に進学しました。『高校生になり、周りがみんな健常者という私にとっては「異常」な環境である普通高校のクラスで、理不尽な劣等感に苦しんでいた私は、「すべて国民は、個人として尊重される」（13条）と謳う憲法の「基本的人権」に触れたとき、世界が少し変わって見えたような気がしました。人は生まれながら不可侵の権利を

有する、個人は尊厳である、という人権の理念。それは私にとって、苦痛に満ちた現実を超える、等身大ではない「世界」との出会いでした。』

（横藤田誠『精神障害と人権—社会のレジリエンスが試される』法律文化社、2020年、49頁）<すみません。ちょっと宣伝>。

<自分はここにいていいのかな>とビクビクして過ごす毎日。そんな私にとって、憲法が掲げる「個人の尊厳」「幸福追求の権利」という理念



は、自分の生きている「今」「ここ」とは違う、もうひとつの「世界」だったような気がします。今振り返ってみれば、きつい思いをしていた私にとって、それは希望と未来を手にした瞬間だったのかもしれませんが。

でも、一方で疑問も抱きました。障害者など不利な立場にある人々にとって人権は希望の象徴であり、人権を切実に求めているけれど、それは本当に実現しているのだろうか。毎日のニュースに触れると、到底そうは思えなかったのです。それはなぜだろうか。

こうして私は、当初の志望学部を変えて法学を学ぶこととなりました。大学で法学・憲法を学んでわかったのは、人権は多数派の人間が作ったものという当たり前の事実です。だからこそ、マイノリティがそれを享受するには多大な困難が伴うのです。人権は、すべての人を幸福にできるわけではありません。でも、人権は人の不幸を減らせることはできると信じています。



コロナ禍によって「ステイ・ホーム」が唱導される時、閉ざされた家庭の中で苦しんでいるかもしれない子どもたちのことを憂えています。学校や保育園からの通報が途絶えた上、新型コロナを理由に家庭訪問を拒否する保護者も相次いでいる、との記事も目にしました（毎日新聞 2020年5月1日）。希望と未来を奪われている子どもたち。かつての私が経験したよりもはるかに大きな重荷を抱え、多くのものを剥奪されている子どもたち。

その子どもたちにとって、CAPが訴える「大切な3つの権利」——Safe（安心）Strong（自信）Free（自由）が、どれだけ価値のあるものか。どの子どもも、自分自身が価値のある大切な存在であることを知り、自信と勇気を取り戻す。他の人もかけがえのない大切な存在であることを実感を持って知る。できることなら、自分が「普通」ではない、何か劣った存在であると信じさせられていた子ども時代の私に、ぜひとも知らせてやりたいメッセージです。

CAPの訴えは、いつの時代も子どもにとって重要です。自分の周りにしか「世界」がない子どもたちにとって、「今」「ここ」とは違う、もうひとつの「世界」（居場所）があることを実感をもって伝えることこそ、子どもたちが未来と希望を取り戻す唯一の道ではないかとすら思います。とりわけ、今のような状況では、それが強く求められているのではないでしょうか。

二次障害が悪化している私にできることは限られているでしょうが、できるだけのことをしたいと思っています。どうかよろしく願いいたします。

コロナ禍での子どもワークの依頼

松下 マリ子

「ずっとマスクしてファシリテートできるかな」「ロールプレイはいつも通りでいいの？」
「特別な叫び声は？」2校からワークショップの依頼がきましたが、コロナ禍の昨今、不安なこと、不明なことがいっぱいでした。そこで、事前訪問に先立って、急きょCCJからのアドバイスを参考にして、ミーティングを開きメンバー間で対応を確認、共有しました。

—CAP 広島の対応—

- 当日のメンバーの検温、体調チェック
- 布マスクを透明マスクに変更
- 教室に入る前の手指消毒
- ワークショップ中やトークタイム時のフィジカルディスタンスの保持



以上を文面にして学校にお渡しすることになりました。

さて、当日。お互いにマスク着用なので、声が聞こえづらい場合もあります。「聞こえにくかったら教えてね。みんなの声も聞き取りにくいときは、もう一度言ってねと言うからね」と事前に伝えました。また子どもの表情も分かりにくいので、しっかり目を見たり、子どもの姿勢、体の緊張などの観察も意識的に行いました。子どもたちは平生から指導を受けている様子で、トークタイムの時も密にならないよう上手に並んでいました。学校側からは、「透明マスクは表情が見やすくよかった」「手指消毒をしてくれていて安心する」と言っていました。

手探りでの2校のワークショップでしたが、学校と密に連絡を取り合い、先生方にも協力をいただきました。また、メンバー同士でも話し合いを持ち、対応を確認、共有しあえたことで、無事にCAPを届けることができよかったと思っています。



